



アホウドリ通信

No. 6

2025年9月1日



発行：
(公財)山階鳥類研究所

安全なアホウドリの繁殖地を新たに作るために実施された「ヒナ移送プロジェクト」。2008年から2012年まで、伊豆諸島鳥島から小笠原諸島賀島に、アホウドリのヒナを移動させて人工育雛が行われました。このプロジェクトが終了してから十数年。賀島では今年も無事に3羽の雛が巣立ち、新たな繁殖地としての歩を進めています。

さて、賀島では現在どのような個体が繁殖しているのでしょうか？ 賀島では2012年から、飛来個体を識別しながらアホウドリの繁殖行動が記録され、繁殖地再生事業の進捗が詳細にモニタリングされています。この調査の結果、賀島ではこれまでに繁殖した個体がわかっており、家系図を作ることができます。今回は賀島のアホウドリファミリーを詳しく紹介します。

■ 繁殖地復活プロジェクトの今、小笠原諸島賀島はイチローの王国へ!?

アホウドリはかつて、小笠原諸島では父島や母島をはじめ多くの島々に生息していたとされています。ところが、羽毛採取のための乱獲により明治10年代後半には、北部の賀島列島に生息するだけとなりました。そして最後に残った小笠原の個体群も昭和初期、1930年代を最後にその姿を消してしまいました。アホウドリは、基本的に自分の生まれ育った場所（島）に戻り繁殖を開始する習性（繁殖場所への定着性）があります。そのため一度地域個体群が絶滅し、ひとつの繁殖地が消滅すると、そこにまた繁殖地が築かれるためには他の繁殖地から新規探索性の強い個体が複数飛来し、再びその場所で繁殖を始めないといけません。

アホウドリの繁殖地は、乱獲による個体数の減少後、伊豆諸島鳥島と尖閣諸島にしかありませんでした。そこで、アホウドリ保全チームは2000年代はじめからアホウドリの繁殖地を増やすために具体的な計画をたて始めました。そして2008年から5年間、鳥島で生まれたヒナ合計70羽を小笠原諸島賀島に移送し、人間の手で巣立つまで飼育することで、その個体をファウンダー（創始個体）として小笠原諸島に繁殖地を復活させるプロジェクトが開始されました（写真1）。

その成果はすぐに現れました。2011年には、2008年に巣立った個体を中心に7羽が賀島に帰還しました。そのうちの1羽は、調査員が最初に足環（Y01）をつけた、その後イチローと呼ばれる個体でした（写真2）。その後も巣立った個体の半数弱の少なくとも29羽が賀島に戻ってきたことが確認され、なかでもイチローは毎年必ず賀島に戻ってくるようになりました。しかし、そのほかの多くの飼育個体はその後賀島に定着せず、なかには巣立った賀島ではなく、生まれた鳥島に戻って定着した個体もありました。現在も賀島に毎年戻ってくる飼育個体は、イチローを含めた3羽のみ（Y01、Y11、Y31）となっています。

初めて賀島で繁殖を試みたのもイチローでした。2012年秋に賀島に飛来していた足環のない個体（ユキ）とつがいになり



写真1 賀島繁殖地



写真2 Y01（イチロー、2011年撮影）



写真3 (左から) イチロー、ユキ、ミライ (2016年撮影)

営巣し、卵を温めました。しかし、卵は孵化することなく、繁殖は失敗に終わりました。次の年も、その次の年も、イチローとユキは繁殖を試みますが、やはり卵が孵化せずに失敗してしまいます。それでも4年目、イチローが8歳になった2016年1月、ついにヒナ(Y75)が誕生しました(写真3)。「ミライ」と名づけられたそのヒナは、その年の5月に巣立ちました。



写真4 イチローとヒナ(2019年撮影)



写真5 吠えるイチロー(2022年撮影)



写真6 ミライとヒナ(2022年撮影、撮影者:南 俊夫)

…あれから10年。イチローはその後何度も繁殖に成功しました(写真4)。2020年秋にペア相手の

ユキが島に戻ってなくなってしまいましたが、その後はY11とペアになり、今日に至ります(写真5)。イチローの息子であるミライは、2019年に智島に帰還し、野生個体とペアになり、2022年に繁殖に成功しました(写真6)。ミライの弟にあたるY76もY31とペアになり、2023年から繁殖に成功しました(イチロー家系図参照、3ページ)。

2025年まででイチローが智島で巣立たせた子の数は8羽、そしてイチローの孫にあたる、ミライとY76の子は合計7羽になりました。ところが、言い換えると、これまでに智島で巣立ったアホウドリ計15羽は全てがイチローの子、あるいは孫にあたります。智島はイチローの王国になったのです… 実は、これはアホウドリの保全を考える上では、あまりよろしくありません。遺伝的多様性を確保した確実な繁殖地形成のためには、今後なるべく早い段階でイチローやイチローの子孫以外のペアによる繁殖が期待されます。

しかし、イチローがいなかったら現在の智島の繁殖地はどうなっていたでしょうか。智島の繁殖開始は少なくとも数年は遅れ、現在のように毎年10数羽が飛来し、ヒナが複数生まれている状況にはなっていなかったと予想されます。プロジェクトの成否、小笠原の繁殖地復活、ひいてはアホウドリ全体の保全においてイチローはとても重要で、アホウドリ史において決して無視することのできない偉人(鳥)なのです。



The pedigree chart illustrates the lineage of birds across three generations:

- 第1世代 (Generation 1):** Includes Y11 (2009 nesting), Y01 (2008 nesting, highlighted in red), and ユキ (Wild).
- 第2世代 (Generation 2):** Includes Y87 (New Born), Y84 (2024 nesting), Y80 (2022 nesting), Y79 (2020 nesting), Y78 (2019 nesting), Y77 (2018 nesting), Y31 (2010 nesting), Y76 (2017 nesting), and Y75 (2016 nesting). Y75 is paired with ミライ (Mirai) as the second-generation mate.
- 第3世代 (Generation 3):** Includes Y88 (New Born), Y85 (2024 nesting), Y83 (2023 nesting), Y89 (New Born), Y86 (2024 nesting), Y82 (2023 nesting), and Y81 (2022 nesting).

Legend:

- 第1世代
- 第2世代
- 第3世代
- 野生 足環のない野生個体 *

* 尖閣諸島生まれである可能性が高い。
伊豆鳥島生まれの個体には足環が装着されているため判別できる。

Other Symbols:

- おえい: 今シーズン確認された賀島生まれ個体
- : 巣立ったが帰還は確認されていない個体